Invisible Man における地理の問題
—聴覚、触覚、嗅覚、味覚、視覚の南部—

峯　真依子

序

Invisible Man における地理的な要素を手がかりとして、主人公の世界像の変容を明らかにするのが、本稿の目的である。北と南という方角や、上と下という方向、および時折描写される世界地図は、作品の磁場を作り出すような役割を果たしており、ストーリーの全体の方向感覚や主人公の内面を、根底のところで支えている。

Invisible Man を地理的な観点で論じた研究として、Melvin Dixon の *Ride Out Wilderness* がある。Dixon は *Invisible Man* における地下を、文化という側面ではむしろ標高の高い場所としてとらえる（56）。また、Ellison の描く落下の動きは、地理的比喩としてはまったく逆であり、隠された文化的地形の発見や自己形成へとつながっているため、内面的な浮上の契機としてとらえるべきだと述べる（72）。

地理への着目については、Dixon による先行研究に負うところが大きい。しかし、それをさらに先へ進めたい点は、*Invisible Man* における地理的な要素は、実はアイデンティティーの形成よりももっと先んじた形で、むしろ瞬間的に主人公の感覚や感性と結びついた形で表出されているのではないかということである。つまり、ある場所から漂ってくる匂いや、暑さ、ざわめきなどに対して、逡巡や思考よりもっと速く、反射として反応してしまう嗅覚、触覚、聴覚などの五感に注目しなければならない。

なぜならば、この *Invisible Man* という作品は、その文学技法の豊かさや独創的魅力に応えるかのように、層の厚い研究がなされてきたものの[1]、しかしあるひとつの点で、共通した論点を提示してきたからである。すなわち、タイトルの "invisible" どおり、不可視性や盲目性といった視覚に関するキーワードで論じるか、すくなくともそのことを前提として、主人公のアイデンティティーが論じられてきたのである。

しかし視覚以外の感覚、すなわち聴覚、嗅覚、味覚、触覚も実は同様に、

作品に書き込まれている。そこで本稿では、着眼点を地理に置くことによって、これまで盲点となってきた視覚以外の感覚についても考察し、作品の新たな一面を示したいと考える。さらに、地理的な要素によって立ち現れる聴覚、嗅覚、味覚、触覚、視覚の瞬間を明らかにすることが、本稿の二つ目の目的である。

1. サツマイモの匂いと味

まず、この作品の大きな方向感覚を確認したい。南部の黒人大学を出て成功を信じていたものの、事実上放校された主人公はバスで北へ向かう。ニューヨークに着き、ハーレムへの行き方を人に尋ねると "You just keep heading north" (157). と答えがかえってくる。そして "... up North" (158). と自分自身に言い聞かせながらハーレムへ向かう。このように、主人公の身体の動きは、南から北を向いていることを覚えておきたい。

そもそもこの北という方角は、黒人霊歌に多く歌われてきた。たとえば五線譜に記録された最古の黒人霊歌には、出エジプト記の Canaan が出てくるが（Allen 10, 76, 95）、それはダブルミーニングとして奴隷の逃亡先のカナダも意味した。また、Robert B. Stepto の指摘する北へ向かう物語 "ascent narrative" (167) は、19 世紀の Slave Narratives で繰り返し語られてきた一つのパターンである。さらに Frederick Douglass の発行した新聞は *North Star* であり、アフリカン・アメリカンにとって自由はつねに北と共にあった。

悪意に満ちた文面とは知らずに後生大事に推薦状をたずさえ、有力者をたずね歩く就職活動と、ようやく職を得たペンキ工場で巻き込まれた爆発事故の後で、失意の主人公にニューヨークで最初の冬が訪れる。ハーレムの冷たい大気の中、通りを歩いていると、不意にサツマイモが焼ける匂いが漂ってくる。"I stopped as though struck by a shot, deeply inhaling, remembering, my mind surging back, back" (262). と、匂いで主人公の思いは過去へ移動する。不意に、柔らかい皮から甘い中身をしぼり出しながら、教師に隠れ「世界地図」の裏でむしゃむしゃとイモを食べた故郷での記憶がよみがえる。

たとえば Paul Rodaway は *Sensuous Geographies* において、嗅覚は他の感覚に比べて「私たちを取り巻く比較的広い範囲にアクセスさせる感覚」

(62-3) であり、しかも「匂いがあれば、匂う以外に選択肢はない」(63) ため、自分の意思によって拒否できないという。また「匂いの記憶は、しばしば長期的でかつ正確であり、（中略）嗅覚は通常、現在と過去の場所の経験と結びついて、記憶がよみがえる重要な役割を演じている」(64) とも述べる。つまり、現在主人公がいるハーレムの路上が結びついた場所とは、まぎれもなく南部であり、イモの焼ける匂いが、主人公の通った学校の教室を呼び起こす。

たまらなくなって主人公はイモを買う。熱いイモを食べると、強烈な解放感が襲ってくる。自分が本当に好きな物を食べるという喜びに浸った次の瞬間に、自分を放校した憎き学長の Bledsoe[2] に爆発的な怒りでもって悪態をつき始めるが、内容は食の嗜好である。"you sneak and eat them [chitterlings] in *private* when you think you're unobserved!" (265) また chitterlings だけでなくその後に "with mustard greens, and racks of pigs' ears, and pork chop and black-eyed peas" (265) が続くのは、南部料理の中でも、ソウルフードと呼ばれる黒人料理を思い起こさせる。

豚の小腸料理である chitterlings のように（Willard 39-46）、ソウルフードとは、もともと奴隷時代に白人が食べ残した部位を、美味しく工夫を凝らす中でレシピが発展してきた料理であった。またサツマイモは奴隷時代の主食であり、やはり南部に深く結びついた食べ物である。共に、変えようのない出自を表す味覚である。よって、主人公は北を向き、また北にとどまっているにも関わらず、思いがけない匂いや、味によって、彼の嗅覚と味覚は南をとらえてしまうのである。

2. 世界地図とブルース

失意の主人公は、入会した政治組織 Brotherhood でイデオロギーを身につけ、アジテーターとして組織の中で力をつけていく。ひとつ奇妙なことは、数回にわたって描写される事務所での場面で、何気ない主人公の視線の先に、世界地図があることである（361, 378, 381, 446, 500）。壁の大きな世界地図を見つめるという、目立たなくも、繰り返される描写に、何を読み取るべきであろうか。

さて、作品分析として地理的な要素を分析するためには、そもそも地理をどのようにとらえていくのかという問題がある。近代地理学は、地表に

あらわれる人間や自然などの諸事象を、システムの一部として客観的・科学的に解き明かしてきた。しかし1970年代後半に、エドワード・レルフやイーフー・トゥアンら現象学の影響を受けた研究者によって人間主義地理学が始まり、あくまでも人間の主観にもとづいた地理的経験が重視されるようになった。いわば、地理学から排除されて久しかった人間を主体として回復させ、人間の主観に地理学を再構成する画期的な試みだったといえる。

わかりやすく言えば、精巧な世界地図を完成させることが近代地理学の宿命だったとすれば、最近の地理学の発想は、私たちが地図を見ることは、どういうことかというように、問いの立て方がまったく異なり、人間の地理認識の問題にシフトしている。それゆえ本稿も、場所や空間を、人間の地理的経験として内側から捉えることを目指す。

では、この世界地図を見るという行為を、どうとらえるべきだろうか。Rodawayは、地図の特徴として、人間主体の視線というよりも「鳥の目で世界を俯瞰する視線」(133)がそこにあることを指摘する。その定義を援用すれば、Brotherhoodの事務所で主人公が世界地図を見るという行為は、人間が全世界を俯瞰し把握することは現実的には到底不可能であるにもかかわらず、把握したつもりになってしまう空虚な全能感だともいえる。Brotherhood は、"We recognized no loose ends, everything could be controlled by our science"(382). という信念で、歴史を統制する（と信じる）。世界を見下ろす視線で構成された、ある意味でフィクショナルな世界地図は、彼らの革命思想の世界を支配できるという感覚と重なる。

やがて主人公は、友人Cliftonが、突然組織を抜け、黒人を模した人形を売る行商を始め（430-5）、警官をなぐって射殺されるという、ほとんど犬死としかいえないような不可解な死に立ち会うことになる（436）。混乱した頭で地下鉄を出ると、重い石でも運んでいるかのように、暑い大気の中を歩く。そこで、これまで気がつかなかった現実離れした様々な衣裳を着た女たちが歩き、色の濃いエキゾチックな色彩のストッキングに、苦しいくらいに気がつく。彼らの顔は、みんな南部の誰かの顔に見えてくる。主人公は汗だくになって歩く（443）。つまり、南部の風景に辿り着くのである。

次の瞬間、通りのレコード屋から、けだるいブルースがしだいに大きくなって聴こえてくる。立ち止まって"Was this all that would be recorded?

Was this the only true history of the times...?"(443) と思う。ブルースは、奴隷解放後の南部で生まれた。そして、これだけが主人公にとって本当の歴史だったのだと腑に落ちたとき、イデオロギーへの信仰が消え去り、主人公がもはや熱っぽく世界地図を眺めることはない。なぜなら前章で指摘したように、主人公がイモを食べたのは、世界地図の後ろであり、この作品の世界地図とは、彼の真の姿を覆い隠すか、彼が真実を見いだすことを遮断するベールのようなものとして存在していたからである。事務所に戻ると、主人公は世界地図と向かい合わせになり、それと対峙させるかのように、Cliftonの人形を置く（446）。

「私たちは目を閉じることができるようには、耳を閉じることができず、音に対しては無防備である」(Rodaway 95)。一方で、見たくない物は目を閉じるか、目をそらすこともできる。この *Invisible Man* には、見える、見えない、見えていない、見ない、見られていると思っていたが、その目は義眼だった、といった視覚のトリックが、多く用いられる。その中で、主人公は、真実を探さなければならない。視覚よりも、むしろ信頼できる感覚として、Ellisonは逆に視覚以外の、聴覚そして嗅覚や味覚までも、効果的に用いている。そしてそれらの感覚を通じて、絶対的なものとして南部の風景が現れるのである。

3. 突如ハーレムに現れる南部の湿気

以下は、Cliftonの葬儀の際の行進である。「振り返る」と、太陽が高く頭上を照らす。この太陽は、もうひとりの登場人物と言ってもいいほどに、葬儀の間中、背後にあって、強く照りつける。

> A hot wind blew from behind me, bringing the sick sweetish odor, like the smell of some female dogs in season. I looked back. The sun shone down on a mass of unbared heads, and.... (451)（下線部筆者）

不意に、盛りのついた犬のような甘い匂いをのせた熱い風は、「後ろ」から吹いてくる。これまで確認したように、主人公の方向感覚は北を向いていたのであり、したがって後ろから前に吹く風は、南から吹いてくる風

だと考えられるのである。

また、Clifton の葬儀のあとで、主人公はハーレムを歩いているにもかかわらず、南部特有の天候の中、南部の道を歩いているかのような状態に陥る。

> I crept along, walking a southern walk in southern weather, closing my eyes from time to time against the dazzling red, yellows and greens of cheap sport shirts and summer dresses. The crowd boiled, sweated, heaved; women with shopping bags, men with highly polished shoes; Even down South they'd always shined their shoes .... I could smell the stench of decaying cabbage.... Oranges, cocoanuts and alligator pears lay in neat piles on little tables. I passed, winding my way through the slowly moving crowd.... The crowd were boiling figures seen through steaming glass from inside a washing machine.... (460) (下線部　筆者)

物売りの声、腐りかけたキャベツの匂い。そして、ゆっくりと動く群衆を、洗濯機の内側から湯気でくもったガラスを通して見ているようだという。つまり、ここで南部特有の湿度が押し寄せてくるのである。南部の湿度を、触覚で感じ取ったときに、主人公は決定的に、南部の風景に取り囲まれる。聴覚、嗅覚と同様、湿度のような触覚で体感する感覚も、否応なしに外から入ってくる感覚であるといえるだろう。そして、湿度は、いくら空間を移動しても、空気がある限り取り払うことができないという意味で、聴覚、嗅覚よりも、さらに強力な南部のメタファーを呼び起こすのである。

4. 五感を貫く垂直性

Brotherhood と主人公の関係は決裂し、一方で Brotherhood の敵対勢力である民主化運動の活動家 Rus the Destroyer からも追われる。主人公の混沌とした状態をそのまま体現するかのように、ある晩、ハーレムに大暴動が起こる。ハーレム住人の１人から "I mean the *top!*" (546) と、屋上に行くよう促され、主人公は彼らとビルに放火する (545-9)。そのとき彼らは、

屋上から下へ降りながら火を放っているのであり、最終的に主人公が hole へ落ちる下への動きは、この放火からすでに始まっているのである。

負傷しながら、ハーレム中を逃げ、駆けずり回る主人公は、"I was going for Mary's but I was moving downtown ... rather than up" (560-1). と信頼する老婦人 Mary のいる up ＝北へ向かおうとするが、たどり着けない。また、この暴動を仕組んだ Brotherhood と対決すべく、反対方向へ向かうが (564-5)、やはりたどり着けない。主人公の南北といった水平の方向感覚が、混乱の中、どこにもたどり着けないという意味で薄らいでいくのに比べて、むしろ垂直的な方向性は次第に強調されていく。垂直の障害物が、主人公の前進を阻むのである。

たとえば、ブロックが雨のようにビルから降り (552)、屋根から人が落ちてくる (552)。街灯の上からは、ぶらりとマネキンが吊り下げられ (556)、主人公を馬に乗って執拗に追いかける Rus は "Hang him up...!" (557) と叫ぶ。必死に逃げる主人公の頭上に、不意に水が勢いよく降り注ぐ (560)。このように、暴動というカオスの中に、上から下への動きが繰り返され、ついに主人公は、誰かが開けておいたマンホールの中に落ちる (565)。ここで、南北という方角の水平性が、上下という垂直性へと完全に転換するのである。

では、主人公の落ちた hole で、彼の五感はどこをとらえているのであろうか。まず視覚である。彼は電力会社から不当に電気をひいて 1369 個の電球 (7) を天井にはりめぐらしているという[3]。そしてこれから 4 方向の壁、また床にも取り付けるという。いわば光によって、地下の地平の東西南北と垂直に貫かれた上下とを支配し、一箇所の盲点となる場所もない。彼は今の自分の状態を、"Being invisible and without substance" (581) と表現するが、それは、彼が肉体を持たない、知覚そのものが露出した状態であると解釈することもできよう。ゆえに hole 自体が、煌々と輝く一個の巨大な眼球と化していると考えることもできる。地上で、ときに不確実であった視覚は、地下で復讐のように肥大化しているのである。

嗅覚については、地上に漂う "the smell either of death or of spring" (580) を嗅ぎ取ることができるようになり、願わくば春の息吹であって欲しいと願う。また味覚に関しては、スロージン付きのバニラアイスクリームを食べるが (8)、アイスは当然のことながら乳製品である。さらに触覚として、"I'm shaking off the old skin and I'll leave it here in the hole" (581). という宣言

は脱皮を連想させる。ゆえに主人公の「再生」(Tanner 42) のイメージが、嗅覚、味覚、触覚によって提示されると同時に、嗅ぎ取る地上の匂いや、スロージンの赤い液をアイスにかけると昇るけむり (8)、やがて古い皮膚を hole に脱ぎ捨てて出て行くというイメージにおいて、それらの感覚は上と、さらに未来を捉えているのである。

一方、聴覚に関しては、今ターンテーブルを 1 台持っており、今後 5 台に増やして全部一度に聞きたい (7) と言う。ある日 Louis Armstrong のレコードを聴いていると、hole のさらに下に落ちていく感覚を味わう。幾層にも深みが続き、どの層からも聞こえるのは、奴隷たちの歌や声、そして耳をつんざくような楽器の音である (9-12)。ゆえに、hole にいる主人公の聴覚がとらえている場所とは、下の方向であり、また、奴隷たちの声や歌によって、黒人がアメリカで遡れる限りの、最も古い過去の南部をとらえているといえる。

したがって、嗅覚、味覚、触覚は垂直に上昇する一方で、聴覚は垂直に下降する。未来を希求する一方で、過去へ引き戻される。ここに、感覚の上昇と下降の深刻な分裂があるのであり、その矛盾は回収されないまま、"And it is this which frightens me: Who knows but that, on the lower frequencies, I speak for you?" (581) という 1 文で幕を閉じる。彼は、hole から、私たちに語っているという。

彼が語っているという低周波は、比較級になっているため、いかなる音よりも低い音域である。つまりここでも主人公は、声によって再度下へ向かう動きを表しているといえる。そして彼の *Invisible Man* という物語を、彼が「あなた」へ向かって、ずっと語っていたことが明らかになったとき、読者は reader でありながら listener へと変えられるのである。そのとき、私たちの聴覚は、低い周波数で刺激され、主人公がその音を発している hole という場所を知覚するのである。

結

本稿は、主人公の五感がとらえる地理を中心に考察した。そこでは、南から北、後ろから前などの平面的な方向感覚に加えて、主人公が hole に落ちる過程で、上から下への垂直な動きが加わったことを明らかにした。すなわち作品は、2 次元的な水平方向への展開から、3 次元的な垂直方向

への展開を試みているといえる。さらには、hole に過去と未来の時間軸も加わることで 4 次元の要素が加わっており、作品の構造に深さを与えているといえる。またそれは、主人公の世界像の変容としてとらえることもできる。

最後に、主人公は南部から北部へバスで移動し、ニューヨークでは地下鉄やバスで移動するが、その時の移り行く風景の描写が少なくない。Ellison はこの主人公の移動性の高さについて「精神が動きまわるのは、(中略) アメリカ人の有り様」(エリスン 76) と述べたが、そのような移動に伴う流れ去る風景や、身体の動きと場所との関係への考察は、また別の機会にゆずりたい。

Notes

1. 最近の動向としては、古典からの読み直しを行った Rankine, Patrice D. *Ulysses in Black: Ralph Ellison, Classicism, and African American Literature*. Wisconsin: The U of Wisconsin P, 2006. が注目されている。
2. 黒人文学の登場人物の名前に極めてユニークで特徴的なものが多いことについては、峯真依子「アフリカン・アメリカン文学と名前のフォークロア—*Song of Solomon* を手がかりにして」『多民族研究』第 4 号、多民族研究学会、2011 年：71-88 を参照。
3. 電流に関する他のエピソードにも着目し、それを「見えない力」として論じる考察は、荒このみ『アフリカン・アメリカン文学論「ニグロのイディオム」と想像力』東京大学出版会、2004 年：第 2 章を参照。

Works Cited

Allen, William Francis, Charles Pickard Ware and Lucy McKim Garrison. *Slave Songs of the United States*. Freeport: Books for Libraries P, 1971.

Dixon, Melvin. *Ride Out the Wilderness: Geography and Identity in Afro-American Literature*. Urbana: U of Illinois P, 1987.

Ellison, Ralph. *Invisible Man*. New York: Vintage, 1980.『見えない人間 (I)・(II)』松本昇訳、南雲堂フェニックス、2004 年。

Rodaway, Paul. *Sensuous Geographies: Body, Sense and Place*. New York: Routledge, 1994.

Stepto, Robert B. *From Behind the Vail: A Study of Afro-American Narrative*. Urbana: U of Illinois P, 1991.

Tanner, Tony. "The Music of Invisibility." *Ralph Ellison*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1986: 37-50.

Willard, Pat. *America Eats!: On the Road with the W.P.A*. New York: Bloomsbury, 2008.

エリスン、ラルフ『影と行為』行方均／松本昇／松本一裕／山嵜文男訳、南雲堂フェニックス、2009 年。

レルフ、エドワード『場所の現象学』高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳、ちくま学芸文庫、1999 年。

トゥアン、イーフー『空間の経験—身体から都市へ』山本浩訳、筑摩書房、1988 年。